

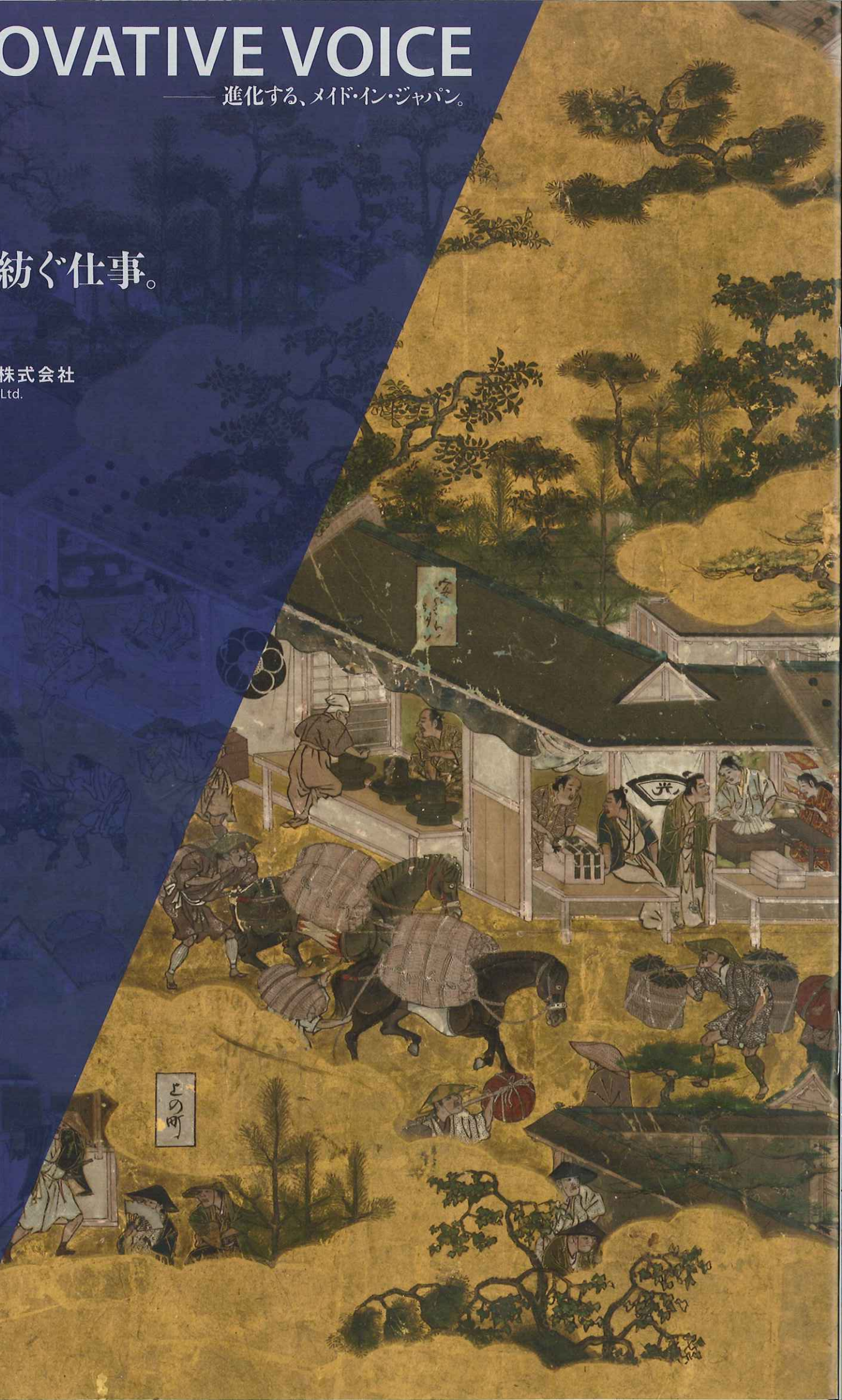
# INNOVATIVE VOICE

— 進化する、メイド・イン・ジャパン。 —

## 歴史を紡ぐ仕事。

18

日本写真印刷株式会社  
Nissha Printing Co., Ltd.





「活字印刷は  
だれでもできる。  
他社の手がけない  
美術印刷をやろう。」

美術印刷という言葉聞いたことがあるだろうか。その名の通り、写真や絵画の印刷のことを指すが、印刷対象が美術品などだけに原色の色やニユアンスをどのように表現するかが非常に難しい。現在では、ほとんど聞かなくなった言葉だが、数ある印刷の中でも技術が必要とされた分野である。そんな美術印刷の歴史において、日本でトップクラスの実績を残し、成長してきた会社がある。日本写真印刷株式会社だ。

創業はさかのぼること1929年。京都日出新聞社（1942年に京都日日新聞社と合併し京都新聞社となる）に勤務していた創業者の鈴木直樹氏が同社の印刷部門を継承し、自宅で印刷所を開業したことから始まった。鈴木氏は在職中、骨董品売立目録などの美術印刷にこのほか興味をいだいていた。「活版印刷であれば、だれでもできる。他社の手がけない美術印刷をやろう。」

そう決意し、とにかく生涯をかけて美術印刷に傾倒したことで、今日の日本写真印刷が生まれることになった。

当時の鈴木氏はこんな言葉を残している。「好きなことに進めば自然と向上心が生じてくる。理想を追う、それが向上心である。時には失敗もあるが、失敗は向上進歩に対する戒めであるからそれにひるまず棒折れせず不撓不屈の精神でなし遂げる強い意志の力を養うことが大切である。」

鈴木氏は好きな道を突き進むことこそ、真に人間が成功する第一の要件であることを自ら的人生をもって証明したのだ。

創業当初は、古美術品のカタログ制作・印刷、撮影から制作・製本までを一貫して行う総合印刷業を生業とした。この方針は一貫して変わることなく、現在も総合印刷会社を掲げ成長を続けている。順風満帆なスタートだった。京都の代表的な活版印刷業者「似玉堂」との合併。写真製版の技術を生かしたメーター類の表示版の作成と着々と成長をし、順調に規模を拡大していった。そして、1979年、印刷業界では実に5社目の東証一部上場企業となった。その後は、産業資材、電子機材、マイク口事業、SP事業へと展開することで、印刷だけでなく産業資材・電子の複合企業へと成長をし、現在に至っている。



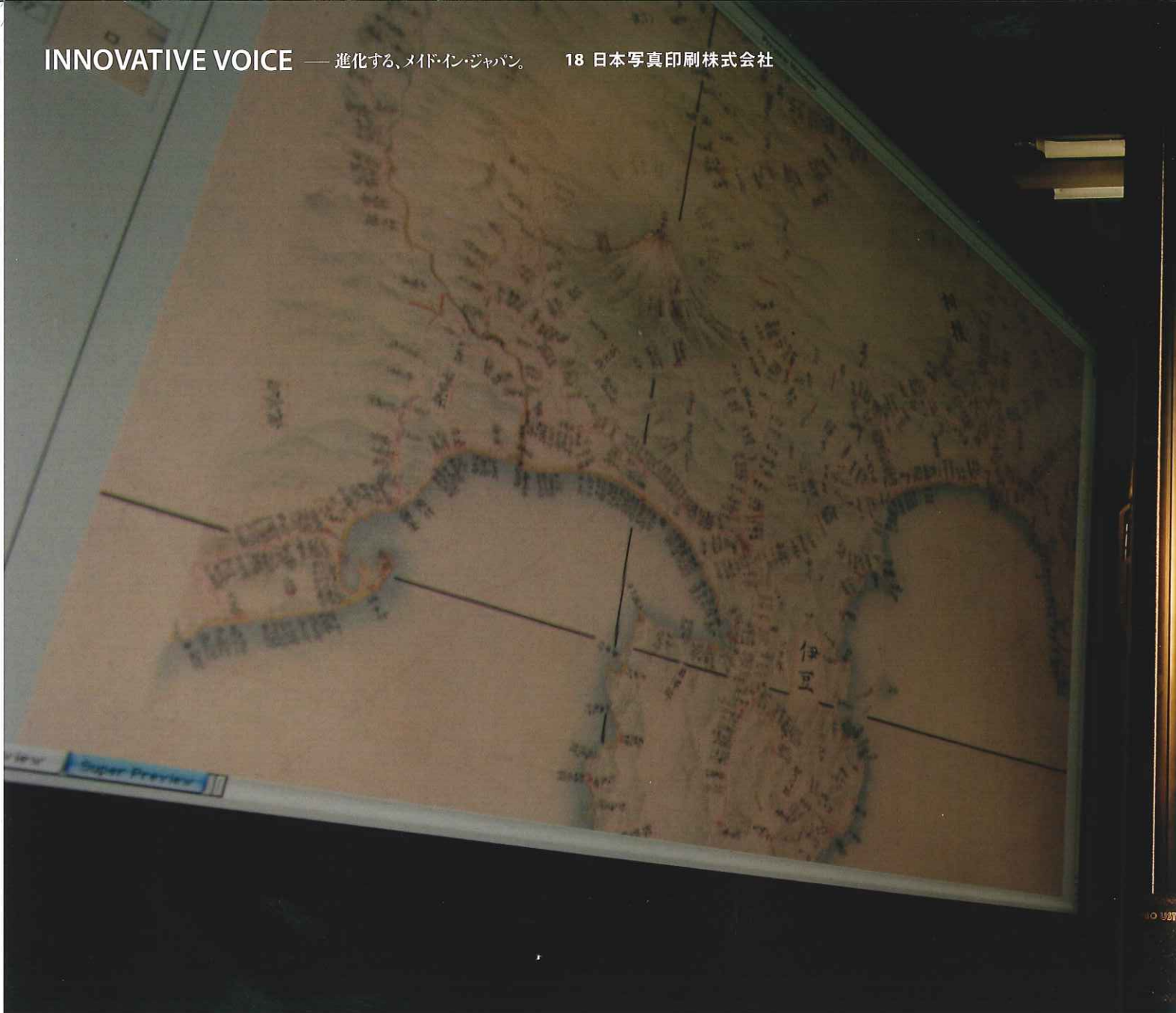
京都本社敷地内に竣工した第二本社棟。「Less is more」をモットーとする建築デザイナー・白崎裕氏の手により、NISSHAの新しい感性を体現する建築が生まれた。「デザインの感性にさらなる磨きをかけてほしい」という思いがこめられている。



日本写真印刷株式会社設立当時の工場正門。

日本写真印刷。社名に「写真」が入っているのは、同社のこだわりの表れである。良い印刷（アウトプット）を実現するためには、良い素材（インプット）が必要不可欠である。だからこそインプットにこだわり、どこよりも精密で質の高い写真を自分たち自身が撮影できることが、印刷のレベルを高めることにつながるという考えだ。そこで、日本写真印刷のクオリティの源泉である、写真への徹底的なこだわりを紹介したい。写真といってもその分野、技術は多岐にわたるが、同社が注力する事業である文化財・美術品を複写する「デジタルアーカイブ」の技術にフォーカスしていく。





「どれだけ写真の技術が進化しても、たどりつけない『本物』。生涯かけて追い求めています。」

日本写真印刷は、社名に「写真」という名称を入れるほど、自社での撮影技術にこだわってきた。高級印刷を謳う会社である以上、素材である写真にも最高級の質を担保したいという思いがあったからだ。そして、日本写真印刷の写真へのこだわりとは、技術を蓄積することであり、時代を捉え続けることでもあった。

ここ10年ほどの間に、写真を取り巻く環境は大きく変わった。フィルムカメラからデジタルカメラへの移行は私たちの記憶にも鮮明に残っている。特にデジタルカメラの進歩には目をみはるものがあった。当初は印刷物としては使いものにならないようなレベルだったものが、今では携帯電話でさえもそれなりの写真が撮れる時代。そんな進化のスピードを捉え、いち早く取り入れてきたのが日本写真印刷。まだ世間がデジタルカメラになど見向きもしなかった1995年当時、将来必ずほとんどのカメラがデジタルになると予測を立て、赤字覚悟で会社を動かした男がいた。橋本禎郎。現フォトクリエイティブ部の部長である。時代の流れがそうなることは確かに予想ができた。踏み出す勇気と行動力があつたかどうかの違いなのかもしれない。だが、ここで一歩を踏み出したことが、今の日本写真印刷の高度な技術レベルへと確実につながっている。

日本写真印刷の設計段階のコンサルティングを含めた撮影技術は、デジタルアーカイブ分野では定評がある。あなたがこれまでに見たことのあるカメラの、最高画素数は何万画素だろうか。おそらく、数千画素が最大だろう。だが、日本写真印刷では9億画素という

超高精細レベルで原寸複製することができる。この撮影を可能にしたのは、全画像を16分割で撮影するバックスライド方式。また、質の高い画像を定義するために解像度に加えて階調、色情報、濃度、形状の計5点を自社で独自に考案。さらには高照度の照明システム、3次元歪み補正ソフトなどはすべて、最高の写真を残すために自社で独自に開発したものである。

日本写真印刷が独自の技術を開発するきっかけとなったのは、博物館からの原寸復刻のニーズだった。しかし現存するカメラでは屏風などの大きなものに関しては、とても対応できなかった。そこで、画面を細かく分割して撮影することで必要な解像度を確保できるのではないかとこの発想のもと、開発したのがバックスライド方式。6000万画素の写真が16個所分集まって合計9億画素の一枚絵をつくり出すことを可能にした。

また一方で、文化財・美術品を撮影する上では、暗所から持ち出すことでさえダメージを与えてしまう可能性がある。被写体を守るためには、いかに素早く撮影を進められるかが鍵となるのだが、バックスライド方式では、撮影スピードを飛躍的に加速させた。撮影スピードと高精細画質の両立。だからこそ、デジタルアーカイブは難しい。日本写真印刷の技術が評価される理由がここにある。

橋本氏は言う。

「もはや、写真を撮影するというよりも超高精度のスクリーンをしている感覚でしょうか。色も存在感もすべて含めて『本物』にどれだけ近づけることができるかを追求するのがこの仕事です。技術が進化するほどに、絶対に追いつけないと思える『本物』。フォトグラファー人生をかけて求め続けています。」

この超高精度写真の技術を利用した、デジタルアーカイブ事業が残してきたのは、歴史に残る数々の美術品。御所の御物、二条城や西本願寺の襖絵など、京都・奈良を代表する寺院をはじめ、日本各所の博物館の館蔵品の撮影など、幅広い。教科書や図鑑などで一度は見たことのある美術品。実はアーカイブしたのは日本写真印刷かもしれない。





「洛中洛外図屏風(舟木本)」東京国立博物館所蔵の原寸複製。日本の文化を未来に残していく仕事だ。

「写真を通して過去と今を紡ぐ。  
アーカイブにはそんな価値が  
あると思っています。」



フォトクリエイティブ部・部長の橋本氏。  
日本の文化が優れていることを、改めて  
みんなに知ってほしいと言う。

日本写真印刷が撮影技術をここまで高められた背景には、京都で生まれ、京都を中心に仕事をしてきたという理由がひとつあげられるだろう。文化の都、京都では歴史に残るさまざまな美術品が溢れているだけに、人々の目も肥えている。当然、仕事における要求レベルは高くなるのだ。その要望に応え、期待を越え続けてきたことで、自然と技術力が磨かれていった部分はあるだろう。こうして、高品質なデジタルアーカイブに携わってきたからこそ考えるところがあると橋本氏は言う。

「実は、日本はデジタルアーカイブの分野では世界に遅れをとっています。例えばここ京都にしても1000年以上も昔から都として栄え、様々な美術品が残されてきたのに、保存への関心がまだ薄い。モノはいつか風化してしまうことに気づいていない人が多すぎるのです。」

風化せずとも、地震や大雨などの天災によって美術品が消失してしまう可能性はある。その危機感がないのかもしれない。もしくは、価値あるものがそこにあることに気づいていないのかもしれない。

一方では、美術品を写真にして残すことに価値があるのかという疑問が浮かぶ。これに対し、橋本氏はこう言う。

「『源氏物語』を知っていますよね。実はあれは写本です。本物は歴史のどこかで失われてしまいました。私たちが写真で目にするあの本は、本物をだれかが書き写したものです。しかし『源氏物語』として、他にはかえられない価値がある。私たちの写真も同じだと思います。いつか本物が何かのきっかけで無くなってしまっても、本物同等の価値を持ち、歴史を語る日が来るはずですよ。教科書にも載るかもしれない。だからこそ、出来る限り本物に近づける努力をしますし、今アーカイブしておかなければいけないのです。」

そして、さらにこう付け加える。

「この仕事を通して、さまざまな美術品に出会っていると感ずることがあります。それは、日本の文化や芸術は本当に優れているということ。戦後、高度経済成長というスピードの中で自国の良さを改めて振り返る機会が無くなってしまったのかもしれないが、驚異的な復興とひきかえに大切な何かを失ってしまった。日本人の文化や感性は素晴らしいことを改めて知ってもらい、誇りを感じて欲しい。忘れかけているアイデンティティを取り戻して欲しい。大きな話をすれば、アーカイブ事業を通して私たちが伝えたいことは、ここにあります。」

収まらぬ不況の波にあえぐ昨今。日本らしさとはなにか。自分たちが世界に誇れるものとはなにか。そんな大切な物を今一度立ち止まって考えることで、何か答えが見つかるのかもしれない。日本写真印刷は印刷やアーカイブ事業を通して、今日も私たちにメッセージを投げかけ続けている。



## PROFILE

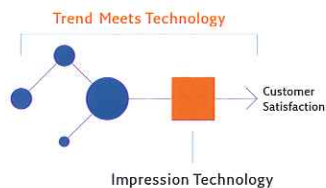
### 日本写真印刷株式会社

<http://www.nissha.co.jp/>

#### 会社概要

- 代表取締役社長 兼 最高経営責任者 鈴木順也
- 創業 1929年10月6日
- 設立 1946年12月28日
- 資本金 56億8,479万円
- 社員数 1,023名(連結3,728名)  
※2010年3月末現在
- 連結子会社 22社
- 拠点数 国内11カ所
- 海外(現地法人含む)25カ所
- グループ一覧  
ナイテック工業株式会社  
ナイテック・モールドエンジニアリング株式会社  
ナイテック・プレジジョン株式会社  
ナイテック・プレジジョン・アンド・テクノロジー株式会社  
ナイテック・フジケミカル株式会社  
株式会社ニッサインターシステムズ  
Nissha USA, Inc.  
Nissha Europe GmbH  
ニッサンコリア株式会社  
日写(上海)科技貿易有限公司  
香港日寫有限公司  
台灣日寫股份有限公司  
Eimo Technologies, Inc.  
Southern Nissha Sdn. Bhd.  
広州日写精密塑料有限公司  
日写(昆山)精密模具有限公司  
ナイテック印刷株式会社  
株式会社エヌ・シー・ピー  
株式会社ディー・ディー・エヌ  
ニッサンSPプロダクツ株式会社  
ニッサンインタラクティブ株式会社  
ニッサンビジネスサービス株式会社

#### ● ブランドシンボル



Trendをあらゆるサークルは、グローバルな市場に潜在するさまざまなお客さまニーズです。  
Technologyのスクエアは、最新かつ最適な製品やサービスを具体化する私たちのImpression Technologyを意味します。  
TrendとTechnologyが出会うとき、私たちは新たな価値を創造し、高いお客さま満足を提供いたします。

# 独自のデジタルカメラ、 デジタルスタジオ・ロケ車で、 あらゆる撮影ニーズに対応しています。



#### 【デジタルカメラ】

日本写真印刷が独自に開発したカメラ。  
16分割撮影で9億画素を実現する。



#### 【フルデジタルスタジオ】

最良の条件で撮影をするために、スタジオの機材やセットも自社で独自に開発する。



#### 【超高性能画像処理】

分割写真を効率的に画像接合処理することにより巨大なデジタル画像を容易に作成することができる。

#### ● 導入事例

##### 【デジタルアーカイブ】

- 二条城障壁画
- 三井寺障壁画
- 北野天満宮縁起絵巻(承久本)他
- 豊国神社豊国祭礼図屏風他
- 南禅寺、天竜寺、醍醐寺、相国寺、萬福寺他多数
- 京都国立博物館国宝・重文画像
- 奈良国立博物館国宝・重文画像

##### 【レプリカ作成】

- 伊能忠敬大図・中図
- 鳥根県立歴史博物館
- 沖縄県立博物館
- 東京芸術大学美術館

##### 【書籍】

- 講談社 絵本「まだかな まだかな」「白鳥」他
- 福音館 復刻本「ふるやのもり」「鹿よおれの兄弟よ」他
- 淡交社 写真集「中山岩太」「ポール・ジャクレ」「ロダン事典」
- @museum 絵本復刻「幻のロシア絵本シリーズ全10冊」

その他美術書、写真集、復刻本、絵本など多数

# NISSHA

## INNOVATIVE VOICE 18 日本写真印刷株式会社(2010.12.1~2010.12.31)

ANAでは2009年6月1日より、羽田空港本館「ANA LOUNGE」にて「日本のビジネスパーソンに、不況を打ち破る活力を!」をテーマに情報発信スペース「INNOVATIVE VOICE supported by ANA」を展開しています。ここでは毎月1社ずつ日本企業を取り上げ、○世になかったもの ○細部への執念 ○少年のような夢 ○広告では語れない想いなどを紹介しています。

INNOVATIVE VOICE 参画企業一覧を、WEB サイトにて公開中

<http://www.ana.co.jp/dom/promotion/iv>

■ 本プロジェクトへのお問い合わせ  
INNOVATIVE VOICE参画・その他お問合せは、下記までお願いいたします。  
INNOVATIVE VOICE事務局(全日空商事株式会社 広告メディア部内)  
メール:innovative@anac.com

Supported by **ANA**